
神がここにいる

小田 浩正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神がここにいる

【著者名】

小田 浩正

Z0305BA

【あらすじ】

僕が昨日から困っている」とと言えば、

明日が来ないことである。

…えつと、「はやくあしたがこないかなあ」「など」という、小学生が遠足前に、考えるような素朴で純粋な気持ちは全くないのでよ…。
なんでこんなことを考えているかと云うと、僕に降りかかった不幸

のせいである。

僕、穂積隆明は例の事件からのことを考えてしまって、あとの人生がどうなるかなんて全く気にしていなかつた。こんな日々が始まるなど思つてなどいなかつた。

神様その他もうもう出てくるハチャメチャなストーリーが始まります。

そして、『電車内は人の心』 もよろしくお願ひします。

プロローグ（前書き）

この作品、結構面倒です。

神様やその他もろもろ出でます。

ハチャメチャなストーリーが始まります。

どうかよろしくお願ひします。

あと、感想もよろしくお願ひします。

プロローグ

僕が昨日から困っている」と言えば、

明日が来ないことである。

えつと、「はやくあしたがこないかな～」などという、小学生が遠足前に、考えるような素朴で純粋な気持ちは全くないのであります。

なんでこんなことを考えているかというと、僕に降りかかった不幸のせいである。

がどうなるかなんて全く気にしていなかつた。こんな日々が始まるなど思つてなどいなかつた。

いきなりですみません。ちょっとヤバい事態が僕の目の前で起きていたので。

僕の叫びを聞いてしまった近所の方。ホント、すみません！
僕の部屋の壁は意外と薄いので、外からの騒音が良く入ってくるのです。なので逆に僕の叫び声も近所に響いてしまうのです…たぶん。女の子の叫び声ならいいのですが、実際は、高音を喉から無理やり出そうとしているので、聞いてしまった方々は朝から不快にしてしまったでしょう。ホント、すみません…。

第1話 第1章（前書き）

最初からがぶつ飛ばします！

感想よろしくつ！～！

第1話 第1章

さて、状況を説明します。

昨日、僕にとつて今まで生きてきた人生の中で、一番の試練に会つてしましました。そのため僕は、今までにない疲れを感じ、そのままベッドで寝てしまいました。なので、寝巻を着てない。風呂にも入っていない。もうそろそろ、秋だところのに、昨日の夜は残暑なんか、暑かつた。

すこし汗を書いているのか、体にシャツが張り付いて気持ち悪い。

「風呂に入ろうかな」

ちよつとずつ鈍い僕の頭がゆっくりですが動き始める。

さつきの叫び声の前あたりに戻りますが、あることに気づいたのです。寝ていたはずのベッドから、落ちているのです。近くに最近買ったマンガも落ちている。元々、寝像は悪い方なので自分でベッドから落ちてしまったのではないかと、考えて田をこする。窓のカーテンからさす日差しに、まぶしさを感じながら、ベッドの上を見たのです。このままの展開ならば……

窓からさす光を浴びて、神々しい姿で寝息（？）しているかわいらしこの子が、すやすやす寝てゐる

ところ真合だと想います。

しかし、僕のベッドに寝てゐるのは……。

「なにやつてんだよー！そんなところでおばさん寝てんなんてー！」

そこにいたのは、だいぶ張りのなくなつた頬、唇は不健康さが目立つ感じのすこし紫色に近い。完全なるおばさんがそこにいた。

「……ん。べつ…したの…？朝から…つるせこ…」

僕の悲鳴と怒声で起こしてしまったのか、少し伸びをしていたりを見た。声がかすれている。絶対寝不足だ！と思いつづりこまぶたが重そうである。

「旦が覚めたか？そんじゃあ、『トーアウト…』

「……？横文字は弱いんだぞ？」

「わかつたから…日本語で言ひ直すから…」

イラついてしまう。不愉快だ。朝からすぐに血圧が急上昇というのは、若くても危ない。

「うん、早く言つてよ。眠いんだけど…」

「早く！出でいけ！」

「…？」

「『』じゃあないつ…！」

「イミガワカラナイヨ？』

なぜカタカナ？

「お前…ケンカ売つてんのか？」

さて、どうしてやるうか。1日3食抜きにじやねつが

「……プスウ…」

「…」いつ、布団に潜り込みやがつた！

「無視したつ！寝やがつたつ…」

「ムシ～ムシ～ムシ～ムシ～」

「ちょ、ちょっとおい！ き、気色悪いから…やめろつて…」

「…うん…」

理解を得られたようだ。それと言わなければならぬことだが…

「お前さあ、今顔がヤバいぞ…」

「え？…か、顔？…か、鏡は？」

周りを見回し始めたので、近くにあつた手鏡を渡す。

「ゲッ！」

やつと気づいたらしく。

ここで一応言っておくが、今まで僕が話していたのはおばさんであ

る。女の子ではないぞ！そこを！」理解いただきたい。

「イヤッ！ なんで早く言わないの！」

色々ゴタゴタしていたから言ひ暇がなかつた。早く言えれば良かつたかもしれない。なぜなら…

「うん！ これで大丈夫だよ！ 私もピッチャピチの～」

「…幼女ね……」

一回後ろを見て少しふつぶつ何かとなえたあと、ちやんと昨日通りの顔に戻つた。

「さて、これで君をイチロロにできるよ～」

まさかあ～。僕はこんな奴には欲情がわかないんだよー。『世のロリータ』なるものには興味がない！

「イチロロにするんだつたら女子じゃなくて、オーナーになりなよ…」

「うつ…」

「でもあ～

彼女の顔のことが本題ではない。僕が問い合わせたいのが「なんで僕のベッドで寝ているのかなあ？」

そう、忘れてはいけない！ 今も僕は冷たい床の上にいる。話している最中、彼女が上から僕を見下していたのだ。全くイライラして仕方なかつた。

「だつてさあ。まだこの家に来て一日目の寝る場所がリビングのソファで寝させるなんて、いつたい君は何さまなんだ！？」

「お前の方が何さまだつつのー。ここは僕の家で！ 僕の部屋で！ 僕のベッドなんだぞ！」

「それが？」

「ピチッ… キレたぞ！」

「そこにいる化けたおばさんが僕の部屋にいる理由など、なーつー息ついて

「そしてお前とあと一週間過ぐなければならないなんて」めんどつ！」

「それは、きのうはなしたでしょ？」

「あわかつてこるとも。そうしなければならない理由は彼女にはあるが僕にはないのだよ！」

「それに僕はおばさんとも、幼女とも同棲したくないんだよー。きれいな『お姉さん』かもしくは『美少女』かだ！」

「そ、そんなあー」

「わかつたか！ 僕はお前が持ち込んだ厄介事を今すぐお前といつしょに、捨てたくて仕方ないんだよー。」

「ね、ねえ～そんなことまで言わなくていいんじゃないかなあ？」

「僕にはこれほど言いたいことがあつたんだよ。昨日言わせなかつたお前が悪いー！」

さてどう落としめてやるつか？

「で、でもね？お父様の言うとおりじやなきやいけないんだよ？それがだけは……わかつてくれる？」

ここでのお父様とやらの話をされた。だから、これに対しても一つの言いひとおりでないと僕の命が危うい。

「そんじやあ～さあ……何か僕に利益もあるの？」

「うんうんー、それはこれから君次第だよー。」

……ハツ？

「頑張れば、君の未来は切り開くことができるー。」

「……」

「君とならできるんだよー、君じやなきやむつだよー。」

「いっ、頬を赤らめながら叫んでいるところがかわいいんだけど、実際にはおばさんだから、少し残念な気持ちにされてしまつ。」

「まあ期待しといでいいんだよな？」

「そうだよ。期待しといったほうが絶対いいよー。」

しかし、これからなんだよな。あと一週間耐えられるかわからない。

「さて、僕らがやらなければならぬこととかは、昨日言われたこ

とだけなのか？」

「うんそうだよ。それで、私にもちゃんと能力があるから大丈夫。
なんとか君を助けるぐらことは出来ると思つよ」

「その自信はどこから？」

「元々、保証できるものだから自信があるんだよ！」

「いや、だからそれがどこからなのかつて言つてるの」

「？ だつて神様だから！」

そう、こいつは神様の修行者。

会つたときにそう言われた。堂々とね。

「……うん。わかつたよ」

僕は彼女に笑顔を向けてあげる。内心、憐れんでいます。

「そうでしょ。私のことを信じていれば、君は死なない」

恐ろしいことを言つ。だがこれは脅迫などではない。実際にあつた
から。

昨日は危なかつた。危なかつたというより、死にかけ、死んだ。だ
が、こいつの能力で助かったのかは知らない。

「あ、すっかり忘れてた」

変なこと思い出してしまつた。昨日のことを回想していくら、今一
番気にしてなくてはならないことを思い出した。

「今、何時？」

「ヒツト…私二八人間デ言ウ時間トイウモノガ理解不能デシテ…
絶対わかってるよ、こいつ。

「…早く」

「は、はい！」

2人で時計を探し始める。

いつもはベッドの近くに置いてあるのだが、昨日は時計をセットしなかつたためどこにあるのかわからない。

「あつ！ あつたよ」

「何時だつ！」

「午前八時前です」

「ノオオオオ！」

今日は学校なのだ。それも週のど真ん中。自分が起きた時間が把握していない僕がいけないのだが、いままでとは全く関係がなかつたことに関わり始めてしまったため、何もかも狂い始めているのかもしれない。

「ど、どうしたの？」

「学校なんだよ！ 僕たち学生は勉強に励まなければならぬんだよー」

自分で言つてるのもなんだが、あまり授業には集中したことがない。

「ちよつと、や、ヤバ！」

「？ ホント大丈夫？」

「制服！ 制服はどこだよ！」

おいおい。この時間にはもう学校に向かつてなきや間に合わなくなる。昨日のようにはなりたくない！

「これのことか？」

「おいつ！ なんでお前が踏んでんだよ！」

さて、どうするか？ 親が特殊だから弁当は毎日僕が作つてゐる。なので、どこかしらで弁当を買わなくてはならない。すべて昨日と同じことをしてしまつてゐる。

また、僕は大変な目に会つてしまふのかもしれない。

なんか、「タタタ騒ぎで済みませんが、一応説明しちゃいます。

僕のベッドの上にいるのは、幼女に化けた僕より長く生きている神様の修行者らしい。そして、昨日から居候し始めた。僕はこんな日々を過ごさなければならない。

どうしてこうなったのかは、一回僕の主観の昨日といつより、周りの人々を主観とした昨日から説明をしなくてはならなくなってしまう。

それでは、僕とおばさんの出会いをなるべく短くお話しします。たぶん短くはならないけど。なるべく短くします！なるべく…。では昨日の回想を始めます！

第1話 第2章（前書き）

『電車内は心の中』 もよひしへお願いします。

ある晴れた日のことです。

その日もいつも通りに、教室の窓側の1番奥の席（いわゆる特等席）で、とある授業でよく寝ている、僕の目の前でいつも通りに熱血先生が鼓膜を破るような勢いで、

「起きてるか！」

「は～～い。起きますよ！」

もう完全に慣れてしまったこの会話。

「そうか！ その調子でがんばれ！」

…毎回思うのだが、アホなのかな？ 僕は、黒板なんて見てないで、机で日向ぼっこ窓の方を見て… 「あ、トンビだ」など眺めるかの2択。この授業を全く受けてないことをクラス中のみんなには、知られている。教科書は開かないし、ノートは真っ白つて言つより、この授業だけはノートを持つてこない。なぜかつて言つと、この先生の最初の授業で、僕は驚いてしまった。

黒板に書かれた文字が読めない…。

まあまず、日本語じゃない。

英語でもない。

アラビア語に近いのだろうか、ほとんど記号が集まつて、文が構成されている。

それをクラスのみんなが全く気にしないで、ノートを必死にまとめている。

それに、50分授業のはずなのに1人あたり、ノートをめくる音が普通の授業だと、1~2ページしか使わないはずが、3回以上聞こえるのである。つまり、6ページ。そんなにページを使って何を書いているのか気になってしまつ…。

内心では、もう授業についていけないなあと思つた。というか、確定事項になつてしまつたが…

「いい加減にノートに黒板のをさあ～写したらどうな～」

先生が僕の所から黒板まで戻つて、また何かよくわからない文字列を書き生み出し始めた後に、隣の須原さんが話しかけてきた。

「前から言つてるじやん。日本人なのに先生の文字が読めないんだよ。僕、日本人をやめてしまつていいいのかな？ それとも先生が日本人をやめた方がいいのかな？」

「私は、君がなんで読めないのかわからんないけどね」

「いや、なんで僕以外の人気が先生の文字読めるのかわからんない」

「じゃあ、例えば黄色で書かれたあの文。読めるでしょ」

「× …」

「……。わざと読んでないよね」

「……」

「いかにも、アニメに出できそうな言葉を使ったよね」

「これ以外に、表すことができないんだよ！」

「本当に読めないんだね。君のこと憐れんでいいかな？」

「そんなことで僕はめげない！」

「じゃあ、授業ちゃんと受ければいいじゃない」

もつともである。

「じゃあさ、なんて書かれてるかわかるの？」

「こう書かれてるんだよ『テストに重要だから覚えておけよ。では、書いてやろう。そう、おいしいプリンの作り方 だ！』」

この授業、世界史だつたはずなんだけどなあ…。一応、初めてプリンが広まり始めたか、触れておきたかったのかなあ。それにわざわざ喋つてることをさあ…そのまま書いているのかあああ！

「『材料（5個分）プリンの生地卵 3個（Mサイズ）…』

キン コーン カーン コーン

須原さんの先生が書いた文字の翻訳中に授業の終わりを告げるチャ

イムが鳴つた。

「おひと、もうこんな時間が」

まだまだ説明する気でいたらしい。

「では、授業を終わりにする。今日の授業の復習として、1回でも親のために、私のおしゃべりプリンのレシピを使って、作ってみるといい」

「はいっ！」

「では、わいばー！」

いつも通り、クラス委員長の今図也、「氣をつけ・礼！」の代わりに、

「レディー・ゴー！」

と叫び、ドアの近くに座る人が思い切りよくドアを開けて、先生が勢いよく走りぬけていく。凄まじい音が廊下を響いている。

「さて、部活～部活～。夏の甲子園に向けて、レッツ・ゴー！」

「野球部のマネージャーだつけ？」

話しながら彼女は、足踏みをして

「ぱいぱーーい」

「無視ね…」

走り去つて行つた。

それに、他の子も部活が楽しみなのか、ほとんどの人が、1分以内に教室からいなくなつた。普通に体育系でない子たちまで走つてた。その中に、やつきの彼女も含まれる。最近は文芸部もちゃんと体力作りからがんばるのかな？

さて僕も、学校にいる意味がなくなる。なぜなら、帰宅部なのだから。…あんまり自慢げに言うと心が痛む。というか、帰宅部の目標が誰よりも早く自分の家にたどり着くかの競争なのに、幸先、スタートからもう出遅れた。もう、帰宅部としての威儀がない。まあ元々ないけどねえ…。

「どけどけじけー！」

と掃除係の人がタックルしてきた。いつもながら、とにかく部活に早く行きたいそうで、人のことなんか全く考えてない。よくて3分待つてくれるかどうか、きわどいところ。カツブ麺も待てないのか。こんな教室からとっとと出た俺は、することがない。人生がこんなのでいいのか?と言われると、まあ別にいいかな~というぐらいにグダグダな生活をしている。

こんな日常で僕は十分良かつたのです。枯れてませんよ? ですが僕はこれから日常がこんなにも変わるなど、この時もまだ知らなかつたのです。

第1話 第3章（前書き）

元々原稿を書いてあつたので、1日でこれほど掲載できました。

『電車内は心の中』 もよろしくお願ひします。

僕の特技と言ひてはなんですが、そこらのリア充（僕より生活に充実しているということです）とは違い、朝が強いため、規則正しい生活（身体的に）を充実させているのです。ここは胸張つて自慢しますよ！それで、朝飯も食べ、制服に着替え、いざ行こうとするのですが、たいてい…

「ねえ、お母さんのために、朝ごはん作つてえ～」

だらしないお母さんが登場。髪がボツサボサの状態で、眠たげな顔している。

そして

「なんで、またパジャマ着てないんだよ！ 風邪ひくだろ！」

「前から言つてるじゃない。ちょっとパジャマつて苦手なのよ～」別に家族だから気にしなくてもいいと僕自身が許せるなら、いいんだけど…。子供の僕から見ても、お母さんのスタイルがまぶしそぎるのである。

お母さんの名前は、穂積愛里子。仕事が女優で、40を超えても全く世間からの評判が落ちず上位におり、僕の友達でも、お母さんのファンがいるほどだ。

しかし、それは表の顔だけで、家に帰ってきたら、完全に僕よりおこちやまになつて、家事全般、僕に全てまかせっきりにする。もうちょっとと自立してくれたらいいのに。

「もう行かなくちゃいけないから。というか、フレンチーストグラードは作つといったから」

「ねえ、もうちょっとお母様のために、おいしい心温まる手作り料理とかないの～？」

「どうか、僕の腕に絡みついてくるな！胸が当たつてる…」

「うふふ。赤ちゃんの時は、お母さんの胸を鷺づかみにしてたくせに～」

「とにかくはなれろー。」

「お母さんのためを作ってくれるなら、放してもいいわよ～。だから、おねがいしま～す～」

涙を浮かべた目で僕を上目づかいで見てくる。どう見ても、芸能界の清楚な美人が全くの台無しになってしまってこる。

「もう、わかったよ。ちゃんと作りなおすから…。早く放せ…」

「うんうん。お母さん、明けやんがこんな子に育つてくれて、ありがたや、ありがたや～」

本当に手を焼く親である。

ほんの10分で、ちゃんとした料理が出来上がる。作ったのは、少し焦げたスクランブルエッグ、ワインナーが2本、それも、弁当用の小さい赤ワインナー。あと先ほど作ったフレンチトーストを焼き直し。作っている間、

「まだ、できないの～？」

とか
「早くしてよう～！」

とか
「がんばってえ～」

とか、とにかくうるさかった。

そして、僕の体にまとわりついてきたり、首締めてきたりして、フライパンを手放すしかない状況に追い込まれ、スクランブルエッグを焦がしてしまった。初步的なところで、失敗するなんて、ホント、自分が情けない…。

「じゃあ、明ちゃんの愛の～もつた手料理、いただきま～す～！」
ホントめんどくさい。そういうえば、もつそろそろ学校に行かないと遅刻する時間になつてきている。

「～のスクランブルエッグの焦げ具合がちょうどいい～」
なんか失敗したところが、高評価もらつてるんですけど…。なにが

いいのだろうか？炊き込みご飯のおこげとかならわかるんだけど。

「満足したんならもう行くよ」

「そういえば…。」

「ねえ？今日、確か映画の撮影だつたよねえ？有名な俳優ばっか出るやつ。夜遅いよね？」

「何言つてるの？昨日話したばかりじゃない。明日よ。今日は丸一日暇なの。だから、なんか楽しんできちやおつかな～？」

「ちょっと待て…。明日？昨日話した？何言つてるのか理解できない。だつて、

お母さんの予定聞いたのは、おとといのはず。

おととい、お母さんはドラマの撮影のために、夜遅く帰ってきて僕は母親思いのいい息子のため、温かい料理を作つてあげた。そして、昨日は丸一日休みだということで、ショッピングモールに出かけたと話を聞いていた。

「そうだなあ…近くに新しくできたショッピングモールで明ちゃんのために、なにかいもの買ってきてあげようかな？楽しみに待つててね。あと、時夜さんのために、いいネクタイでも～」

時夜さんは、僕の父さんで、えつと…いまどこで何しているのか、お母さんしか知らない。なぜか教えてくれない。相当やばいことやってるのかな？

もしかして、軍の特殊部隊所属していて、僕たちの平和は彼うつって守られているとか……ないか。

「もう行かないといけないんじゃないの～？」

時計を見ると、いつの間にか10分たつてとっくに、遅刻してしまった時間になつている。

「そりだな……あのさ、もうそろそろあいつも起こしことかないと、学校送れちゃうぞ」

僕の家族は4人家族だ。紹介した両親、僕の他、中学生の妹が

いる。いつも僕に起^ひしてもらわないと起きないが、今日ぐら^こいは自分を大事にしたい。

「うん、わかつたあー。わたしじや起きないかもねえー」

「とにかくお願^ねいね！ じゃあ、行^いってきます」

「いつてらっしゃいー」

でも、さつきの話、僕の誤解だつたのかな。まあそんなことはいいや。今は、僕が遅刻して担任からのしつこい長話^{ながはな}しを聞くのがいやなので、急いで家を出た。

……のはいいけど、ヤバイ…弁当作^{つく}んの忘れてた。

第1話 第4章（前書き）

どうぞん掲載していきます。

遅刻しているついでに、昼「はんのためにコンビニに寄る」とになってしまった。

別に学校の購買で買えばいいかもしないけど、そんなところで買うことになったら、僕なんての華奢な体の僕には、死が待つことになってしまいます。いやマジで…。

昼前の三時間目終わりを告げるチャイムが鳴ると、購買前は戦場化する。

皆求めるは、この学校のOGであり、ミスグラソプリで優勝をしたことある香夜美先輩が1人ずつに渡す『特製とにかく粒が大きいアンパン税込み価格315円』。

なぜそんなところで香夜美先輩が働いているかというと、前まで働いていたおばあちゃんのことが大好きだつたらしく、よく手伝いをしていたらしい。

とっても評判も良かつたらしいのだが今は、寝てないといけないくらい体が悪くなってしまったそうだ。で、おばあちゃんのために引き継いだらしい。

心温まるお話なのだが、実は、香夜美先輩はどんな時でも特製アンパンを誰よりも先に買うために、周りの人を押しのけ、叩き潰していたそうだ…。

その時の彼女の2つ名を『破壊神』。全くもってそのままだな。友達の先輩たちの話では、いつも溢れんばかりの微笑みで、周りの人々を心地よくしてくれる人が、その時だけ妖怪のような恐ろしさを振りまくらしい…想像するだけで寒気がする。

それで今は香夜美先輩がいないので、けが人が前より少なくなつた。それでも、そのアンパン（まだ食べたことないけど）限定10個のために、命がけで戦いたくもなし、そこで戦場に巻き込まれたくもない。だから、コンビニのおにぎり（梅干しとシーチキン）

を買わなくちゃいけない。まあ、通学路の途中にコンビニがあるし、前もって何を買つか決まっているし、そんなに遅れることはないかな。

コンビニ前の交差点にたどり着いた。片側2車線の大通り。両側で四車線。

ここにたどり着く前に赤信号は何回も引っ掛かるとはとんだ災難だつた。

もうホームルームも始まってしまった。気にしない、気にしない。どうせ怒られる。なら、もっと遅く行つてもいいのではないかと考えた。もづ走る気力すらない。もうそろそろ信号が青になるかな〜?

「……長い。長すぎるー!」

大通りだから、信号が変わるのに長いことは、わからなくもない。しかし、排気ガスを吐きながらトラックが走り去らないで静まっている。1台も通らない。なぜだ?

「もう我慢できない…。勝手に渡っちゃおー!」

と思った矢先、後ろから長い茶色を帯びた髪を垂らした十一歳くらいの女の子が僕を抜いて、どんどん横断歩道を突き進む。

先を越された…僕も渡ろう…。

そう思つて渡ろうとしたら、猛スピードで1台も通つていなかつたこちらの車線に車やトラックが一斉に走ってきた。どこかの信号で待たされていたのだね、とてもじゃないがスピード違反しているんじゃないかと思つ。

だが、反対車線の方を見ると1台のトラックがののひ、くねくねと女の子めがけて走つてきていた。

ヤバイ、居眠り運転だ!

彼女も気づいたらしく、反対車線の真ん中で車のほうを見てしまつている。

引き返した方がいいのか、渡つちゃった方がいいのか、わからなくなつてしまつてゐる。

「なんで、そんなところで止まんだよー。」

そこで眺めてないで早く渡れよ！

僕はとにかく走り出した

ながて走っているんだが

ああ、助けるためか……イヤイヤ……何がなんていー、もは、んなことには手を出すはずがないのに！

ああああああああ！

もうしょうがない！

と云ふ點に於けるか? 強き強きでござるは房原が

平賀ハサードロソジミのまう二回ハヒミリ

これも無理そうだ…。足が震えているのが、誰が見てもわかつてしまつ。

も二一かハかたなあ

僕は思いっきり彼女に向かって走る。

と云ふのがいい。と自分が走った勢いで、彼女の手を握って、向かい側に走りこむ。そうすれば何とか間にあんじやないかと考えた。

元る

闇は詔文

「あ

あと一メートルのところ、中央分離帯のあたりで、足元に転がっていた石につまずいた。

なにやつてんだよ、僕よ！
走った意味ねえじやん！

ヤバイ、ヤバイ！

」ついこのときに冷静な判断をしなくては。

……無理だ。

ヤバイ、ヤバイ！

駄目だあああああ！

状況を確認しよう。

たぶん今僕は、ウルトラマンの要領で、飛んでいると思つ。例の「トオツー」で、手を前に出して飛び立つ感じに。完全に三球三振三アウトのようだ。

たぶん、もう僕はそのまま彼女の近くで無様に転ぶだらう。彼女は動けない。

2人そろつて死ぬことになるだらう。

彼女がこちらを見てきた。

泣いている。

恐怖で体が震えている。

動く気配もない。

もう無理だなあ……。

女の子に一応謝つとく。

1人じや死なせないぜ！

心の中でだが。

こんなかつこいい言葉、声に出せるわけがない。

あ～～あ……

最後の最後まで僕は人のために、何か出来る男ではなかつた。人助けぐらいしたかつたなあ……本音だよ。

このまま2人で天国に行こう。

悔いの残る人生だった。

特にまだ、何にもしてないからね。

お父さん、お母さん、ごめんよ。

……いや、まだだ…。

彼女はまだ救いようがある。

まだ、彼女の人生を終わらせるのは、かわいそつだ。
頭をフル回転させる。

せめて、せめて。

僕は体を必死に動かした。
空中で、必死にもがいた。
いわゆる平泳ぎのように。
もう少し、浮かんでいられそうだ。
今、僕は賢いと思った。

なぜなら、この状況でまだ彼女を救える方法を思いついたから。
僕は、とにかく彼女に向かつて飛んだ。

飛んだ。

飛びまくった。

たぶん2メートルぐらい。

そして、彼女の体にタックル！

ホントごめん。

痛いだろうけど、今は我慢が大事！
なんとか彼女を押し出した。

思いついたのはそんな簡単なこと。
しかし助けることは出来たと思う。
残るは僕だけ…。

そして、無様に、地面に落ちた…。
女の子がこちらを見てきた。

驚嘆した顔だ。

タックルされても、痛そうな顔をせず、ただ驚いている。
せつかく助けてあげたのに、微笑みぐらい向けてくれたっていいじ
やないか。

たぶん、最後に見る表情なんだから。

そして僕は彼女に向けて、微笑んだ。

僕が生きている間の最後の表情だ。

そして、死んだあとも笑っていられるよっこ。

涙は出なかつた。

出る理由がなかつた。

時間にして、1秒ぐらいかな。

僕の体はあっさりとトラックのタイヤによつて踏みつぶされた。

第1話 第5章（前書き）

回り口ばかりでなく、トックするの疲れたので、今日せっけんまでです。

ここは、天国である…わからないけど。

絶対そうでなければ、どれほど閻魔大王がちまちました奴なのかはつきり分かる。なぜなら、別に地獄に落とされるようなことはした覚えもないし、最後の最後で人助けをしたのだから天国にいる権利ぐらいはあると思う。

それとも、女の子も巻き添えになってしまったか？

それだったら、天国にいる権利もないか。

じゃあ僕は天国と地獄、どちらに行けばいいのかな…。

それにしても、気になる。ちゃんとあの女の子は生きているのか？もしかして…僕のことを助けるために戻ってきてしまったとか。そうなら、ありがたいなあ…。僕を見捨てないでいてくれる人がいたことになる。

しかし、ここは幻想的なとこである。というか人が思いつくよくなところだつたら、天国いる気がしないはずだ。

とにかく、周りを見ても流れる雲のようなのが、太陽の光のような淡いオレンジに近い赤色と白が混じって、漂っている。まるで僕を包み込むような感じに。

まあとにかく表現するのが難しい。なんともいえないのだ。

そういうえば自分の体がない。ないというか、体がないだけで魂がむき出しになっているかのように、宙に火の粉のようなのが浮いていると考えてもらうとありがたいです。

さて、これから何をしていいのかわからない。動いてみるかと思つて、やろうとしたんだけど、はつきり言つとく。動いてるか分からぬ。

なぜかというと、まず第一に体の感覚 자체がないから。

第一に動いていたとしても、周りを流れる雲のようなものが動いて自分が動いているか、全然わからない。

困った。ホントわからない。助けが必要だね。だれに?……ぐわあ

近くに僕みたいなものもないし、天使のようないがいたつていいのかな? もう神頼みだね。近くと言つても助けを求めると言えば、やつぱ神様ぐらいだね。しょうがない。

(神様)――どうかお願ひします。)

……やつぱ無理か、はあ――。

「ホント、ダメそうね。」――

そんな言葉が聞こえた気がした。

あれれ、何とか届いてしまつた? 聞こえたけど意味が理解できない。そこでなんで『ダメ』なんだ?

僕はこれからどうすればいいのかな? 助けてもらえるかとそんなことをあれこれ考えていたんだが、

周りの景色が急に青と黒の境目のような色が広がつた。

なんだ、なんだ? 何の儀式だ? 太陽の光は消え、雲の流れは速くなり、紫電が走る。

さつきまでの心地よい雰囲気から、冷めた悲しみのようなのが僕の心に押し寄せてきた。

怖い。

マジで怖い。

神をおこらせる事でもしたのか?

お前なんてほんの少しで握り潰すことが出来るんだぜのよつた感じだ。

地獄に落とされたのか?

もうだめだ。

田といつものはないけど、田を開いた。たぶんそんな感じだと思ひ。

完全にシャットダウンした。

本当に周りから切り離されたような感じになった。

わづ、この世界にもいられないと思つた。

かのじこでも飛ばされてしまふ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0305ba/>

神がここにいる

2011年12月31日22時52分発行